

# 「天国へのお引越し」手伝って!

「ありがとう」に使命感。でも、孤独死が気になります。

新真木塾

## よしだ たいち：

日本初の遺品整理専門会社を設立。1件約30万円、社員20人弱で昨年売り上げ4億円を突破。そのユニークな仕事に数多くのメディアが注目。著書にベストセラー「遺品整理屋は見た!」(扶桑社)「おひとりさまでもいいじょうぶ。」(ポプラ社)など他多数。



講演する吉田太一氏

少子高齢化の思わずニーズ  
聞きたくない「遺品整理サービス業」だが、本来は故人の身内や遺族が行っていたこと。6年前の創業以来、依頼は延べ1万件近く。年間約2000件で、年々増えている。

少子高齢社会を迎える多くのひとが兄弟も少なく、遺品整理に費やす時間と人手が確保できない。また、同居もしていないケースが増えて、共有家財意識も薄れている。さらに、ひどによって、身内の遺品を処理する抵抗感を

「遺品は、ゴミではない」が企業マインド

また、故人の生きてきた証しのような品を「要らない」と主張する遺族に、おせつかいを承知で説得して、残すこともある。あとで「捨てなくてよかつた」との声を聞くとほつとする。

とくに、孤独死してしまった故人にとつては、単なる遺品ではなく、長年連れ添つて故人を知り尽くし、癒してきた「ペットのような仲間たち」。「遺品はゴミではない」という考え方方が、当社の企業マインドの原点だ。最近は、女性の50歳から80歳の「おひとり様」

を感じるなどが、依頼増の背景にある。このサービスは「家族関係の崩壊に拍車をかけるのではないか」との危惧もあったが、遺族の皆様に非常に喜ばれ、この仕事への使命感を感じる毎日だ。

金目のものが遺品にあらるでは」と言われるが、心配はない。金目ものはたいていがすでに遺族の手に渡っている(笑)。

## 少子高齢化の思わずニーズ

このサービスは「家族関係の崩壊に拍車をかけるのではないか」との危惧もあったが、遺族の皆様に非常に喜ばれ、この仕事への使命感を感じる毎日だ。

新真木塾(※)(東京都新宿区、世話役・道場守雷雷株代表取締役)は3354・3617)は11月28日、日本初の遺品整理専門会社・(有)キーパーズを設立した吉田太一社長を講師に「遺品整理屋は見た」と題するトークセッションを開催した。「天国へのお引越しのお手伝い」が急増しているという。

## 読者お年玉プレゼント!!



新刊本・吉田太一氏著書「遺品整理屋は聞いた! 遺品が語る真実」(青春出版社)を7名の方にプレゼントします。

会社名、住所、氏名、電話番号、「新真木塾記事を見た」とお書き添えの上、12月末日までにFAX:03・5524・1605まで。応募者多数の場合は抽選で、発表は新年1月に発送をもって。

同社への依頼の約9割が、中高年世帯の独居死による遺族から。その半数は孤独死で、依頼人は立会いを拒んだり、鍵だけ渡して立

いた証し。この仕事を通して、遺品には人類の成長・発展に必要な、故人からの情報が詰まつていると感じる。いつかは自身の回りの品

も、必ず遺品となる。そのことを改めて見つめ直して欲しい。

※・棟梁・田中文男氏を持つ業種交流勉強会

も、必ず遺品となる。

そのことを改めて見つめ直して欲しい。

※・棟梁・田中文男氏を持つ業種交流勉強会

ち去つたり、故人が腐乱死体で発見されたり。自分の死後、自分の生き様で残された遺品は、遺族や他者の記憶に良くも悪くもその人の間の思い出や印象を確定させてしまう。孤独死しないためには、家族の絆、地域社会とのつながりが大切だ。

遺品は人間が生きていた証し。この仕事を通して、遺品には人類の成長・発展に必要な、故人からの情報が詰まつていると感じる。いつかは自身の回りの品